

日本セラミックス協会発行「セラミックス」誌、5月号書評より

◇新刊紹介◇

黒川 高明 著

ガラスの文明史

春風社, A5判, 369 pp.

定価 5,000 円 (本体 4,762 円+税), 2009 年 2 月, ISBN 978-4-86110-172-4

ガラスの歴史に関する書籍といえば、工芸品、美術品としての観点から書かれたものがほとんどであろう。

本書はガラスについて技術的な切り口で文明史を比較解説しており、この点が非常に新鮮である。

ガラスの組成がわかれば、その原料の入手先、そして地理的要因などがわかってくる。

また、ガラスの組成は、作製技法（加工の容易さ、着色性、透明性など）や耐候性にも影響を及ぼす。このように本書ではガラス組成がガラスの歴史を読み解く上で中心的な役割を果たしている。

構成は以下の通りである。

第一章の「ガラスの歴史」は本書の前半を成す。

ここでは「古代4大文明のうち、なぜ、中国では、ガラスが作られなかったのか?」、「ガラス産業が栄える五つの条件」など興味深いテーマが取り上げられている。

第二章の「ヴァルトグラス」は後半の主要な部分である。中世の北西ヨーロッパにおいて木材や植物を燃やして出た灰（カリ）を原料にしている。植物由来成分が入ったガラスである。このガラスを作り作製技術の秘密を守り続けた職人の組織、そして中世の美術を代表するものの一つであるステンドグラスについても述べられている。

第三章の「近代ガラスの始まり」は、その後、現在のガラス製法へ至る道筋が簡潔にまとめられている。

ガラス製の美術品や工芸品の写真そして挿し絵なども使われており、この分野に馴染みのない読者にもわかりやすく書かれていると思う。またハードカバーの装丁は、凝った仕上げとなっており美しい。

(編集委員 千葉 玲一)